

---

# 竜殺しの英雄の指輪

也屋拓郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜殺しの英雄の指輪

### 【Nコード】

N6436Z

### 【作者名】

也屋拓郎

### 【あらすじ】

龍と人間はかつて共存していた。ジグは祭りの日ひょんなことから全裸の少女と出会う。「下種な分際が我を見るとは！ 食ってやる！」そういつて襲い掛かる少女の正体は龍だった。

読みきり4話完結予定。

## プロローグ 邂逅

風が強く吹くことを龍の咆哮と例える。

小さな光がともされる村から民族の音が聞こえる。その音にあわせて響く手拍子と歓声。

空を支配する我らにとって意味の成さない光景だった。

我らは十全な生き物である。孤独であろうと我らは生命を食らいその生命を糧にして生き、そして駆逐という蹂躪を求め我らは炎を吐く。ゆっくりと旋回しながら我らはその嬉々として踊る彼らを今一度見つめる。

なんと儂い生き物なんだろうか。今襲えば我らの血肉として死すしかない存在。

びゅうと風邪を引き即音が我らの耳を掠める。龍の咆哮が聞こえる。

我らはそんな下等な人間にまるで呪いの様な毒を受けてしてしまった。

ふと尿意を感じ、目を覚ました青年はゆっくりと目を覚ました。

隣には見ず知らずの年上の女が寝転がっている。青年はゆっくりとため息を漏らした。

その青年は白銀の髪を有した青年で年は十八というところか。その青年の名はジグという。

ぶどう酒に含まれているアルコールで尿意を感じ、厠へと足を運ぶ。幸い厠には誰もいない。これ幸いと思い、ズボンを下ろし、用を足し始める。

寒い季節に入る前にこの国は魔よけの意味で祭りをする。といってもほとんどが酒を飲み、魔よけの歌にあわせながら踊り、眠るま

で行うものだ。もう広間にある火は消えておりもう祭りは終わっている。

この世界は人間と龍が共存していた。昔、龍と人間は二つで一つの存在としていたのだが、ある日龍は火と空を選び、人間は水と大地を選んだ。それ以来龍は人間の前に現れることはなかった。ジグノす向くには龍とこれからも共存を選んだ国だが実際国民は龍が存在していることを信じていない。もう昔のことなのだ。

背中をブルリと振るわせたジグは廁を出た。戻ろうと思ったが家には知らない女が寝ている。ジグはしばらく外を探索する。人口はそこまで多くなく、隣の国のほうが人口が多くそして経済力もある。ここは少し寂びた国と例えたほうが丁度いいものだった。寒い空気は建物と建物の間を走り、強くジグに吹きつけ、服を通して冷気を伝わらせる。肌の体毛が立ち、体温を維持しようと逆立てた。

「寒い…」

ジグは自分の酒癖の悪さに呪った。自分自身で酒癖が悪いのは自覚しているが記憶にない時点でどうしようもない。

はあと息をつくとふと暖かい空気を感じた。その空気は料理などの匂いに乗ってきているわけではない。ただ炭と、木が燃える匂いとともにきているのだ。

「火事か？」

だが家事はもっと明るくなるはずだ。ならなんだろうか？

少し前かがみになりながら歩く。だんだんと暖かい空気の量が多くなってゆく。どうやら場所は祭りの広場のようだ。

誰か二次会でもやっているのだろうか。広場を中心にして映える建物は幻想的だった。はてと思い覗き込む。

広場にあった火はついていた。轟々と燃える材料は巨大な丸太。大の男が五人がかりで持つてこないとできないような大きさの丸太だ。その丸太の中央部分が集中して燃えている。その木はまだ生木で時々爆ぜる音が響く。その火の目の前で少女が立っていた。不思議な光景だった。生木の燃える広場で少女が立っている。その光景

を見て誰もが不思議であろう。逆光で見えないがその影から容姿は整っているのは十全に分かる。その少女は年からして十五か。

少女の右手がゆっくりと動いた。そして一步右へと跳躍する。着地は音もなく、そしてくるりと一回転した後、軽やかに跳躍をする。その動きは祭りの魔よけの踊りの一節だった。

ジグはその踊りに見蕩れる。

少女の動きはあまりにも軽やかで、そして美しかった。

そう、美しかった。

一通りの踊りが終わったのか、影の少女は静かに踊りをやめた。ジグは操られたかのように逆光の少女の元へと歩みを進めた。近づいたびに心臓の鼓動は大きくなる。いつしか歩行は忍び足だ。

逆光に隠されていた容姿は明らかになる。綺麗な背中中央にへこんだ背筋。美しい線は素肌だった。控えめにある乳房も露出している。

裸だった。一糸纏わぬその姿にジグは声を漏らした。

「……！」

その漏らした声に反応した少女は振り返る。ジグはそこで思考が停止した。

彼女の目は蛇のように鋭くそして青く美しい。髪も火の光でまったく分からなかったが、空色で綺麗だった。ジグは彼女の目を見つめたまま一言言った。

「綺麗だ」

「っ……！」

突然ジグの隣の石畳が砂埃と一緒に爆ぜた。爆風のような衝撃がジグを襲う。ジグは横目でその正体を見た。

青い鱗に覆われた尾。

「貴様、下種な分際で我を綺麗オレというか」

「綺麗じゃないのに綺麗というのはおかしいとおもわないかい？」

よく見ると彼女は頬を染めている。ジグは一步前に足を向ける

「くるな」

「でもこんな季節に服を着てないのは見ている俺も寒くなる。お願いだから何か来てくれないか？」

確かにと彼女は頷いた。するとざわざわと背から青い鱗が張ってくる。胸を隠し、そして下へと鱗が伸びて行き、臍を隠すように鱗が広がる。

ジグはそれを確認した後、彼女に問う。

「君はもしかして龍か？」

「掟を守りし龍族だが人間の貴様はなにを聞きたい」

「いや、確認だただの」

予想外の答えに彼女は肩透かしを食らった。そして肩を震わせる  
と怒声をあげる。

「き、貴様のような浅慮なやつに会ったのは初めてだ！ 貴様を食  
つてやる！」

少女は手を上げジグを殺そうとする。

「僕を？」

ジグは質問を返す。すると少女の手は止まる。

「そうだ！」

「ならなんですぐに僕を殺さないのさ」

「うっ……」

彼女は言葉を詰めた。

「お、掟に『無知には全能の知識を教える』というものがあってだ  
な。それを完遂せねば殺すこともできないのだ」

だから、と彼女はつなげる。

「貴様が質問をすると私は殺すこともできないし食う事もできない。  
貴様は黙って羊のように殺され、食われる！」

そういつて手を上げると突然空腹の音が響いた。ジグではない。

ジグは祭りであらふくと肉を食ったのだ。明日の昼まで食べなくて

も大丈夫だろう。ならば腹の虫を鳴らした者は。

「おなか減ったの？」

「う、うるさい！ 黙って食われればいいのに！」

顔を赤くしてしゃがみ込む。ジグはただただ彼女を見ているだけだった。

これが…龍なのか……。

ジグは頭を少し抱えた。

「これ、少ないけどよかつたらあげるよ」

場所はジグの部屋。部屋にいた女はもういなかった。どうやら帰つたらしい。ジグは最初は半分警戒しながら中に入ったが誰もいないことにほっと胸を撫で下ろした。

少女を部屋に案内すると窮屈だといった。

「そういえば貴様の名を聞いていなかった。名をなんていう？」

「ジグ、ジグフリードそういう君は？」

「君というな、我は高貴な種族だぞ。名を言う必要はない。それに人間の呪術には名を使って支配するというのを聞いているゆえに我は何も言わない」

「左様で」

ジグはそういつと彼女はむっと膨れた面をした。ジグは数分で理解した。

いくら龍であろうと人間と変わらないのだ。ジグはパンと干し肉をふやかしたものをさらに乗せておいた。

「どうぞ」

「……頂う」

少女はがぶりと肉に噛み付く。噛み付く犀に見えた犬歯はまるで狼か犬のような丸みを帯びている。恐怖というより愛嬌というこ

るか。

「まあ下種が食べるようなものだな。まずは食べないこともない」  
「ならよかった。食べないかと思った」

「ふ、ふん」

次の一口で食べきれるものをちびちびと食べ始める。まるで小動物のようだった。

「アリアだ」

「ん？」

突然の名乗りでよく聞こえなかった。

「アリアドラゴニクス。龍族の姫だ」

「姫様か…その姫様がどうしてこんなところに？」

「……」

どうやら触ってはならないことを言ってしまったらしい。ジグはやっぱりいいよと遠慮の言葉を口にしようとしたが、先に開いたのはアリアだった。

「大いなる敵が我らを滅ぼそうとするのを伝えにきたのだ」

「…大いなる敵？」

ああ、と彼女は言う。

「龍と人間、我らと貴様らは元は共存していた。それは大いなる敵と戦うため」

「なら今は人間と龍は共存していない時点で大いなる敵というのはいないんじゃないのか？」

「いないんじゃない。封印していた」

アリアはジグを見つめる。アリアの目は蛇の目のように鋭くそして光っていた。

「我らはまた人間とともに大いなる敵に立ち向かうために舞い戻ってきたのだ」

運命は動き出した。



## 大いなる敵

「我らと人間はそもそも二つで一つの存在だった。龍族は天空から見下ろす守護者として君臨し、人間は地を這う狼として大いなる敵を駆逐していた。それは昔からの伝承で我らはお互いに信じあっていたのだ」

アリアはこの国にもある昔の話をしている。静かに語るように言うその口は艶やかだった。

「だがある日の事その比翼の鳥だった我らは決別してしまった。それは何かは定かではない」

「だけどその日に何かがあった…んだよね？」

うぬ。とアリアは言い、コップを口につける。

「あっつ！」

と喋ってコップを手放した。

「あ、熱かった？ 結構温いと思ったんだけど」

「りゅ、龍族は熱い飲み物を飲まん！ そんな熱のこもった飲み物などi胃が焼けてしまう！」

涙目で言うアリアはどこか幼かった。ジグはため息を吐いてこぼれた飲み物を拭いた。

「龍は猫舌なんだな」

「うるさい！ 食うぞ！」

顔を赤くして言われてもあんまり迫力がないのは誰でもわかる。

「はいはい」

ジグは冷たい飲み物をコップに入れて渡す。アリアはその飲み物をじーと見た後一含みだけ飲み、安全と分かったときにぐいっと飲んだ。ジグはあ、と思ったがまあ大丈夫だろうと思った。

しかしアリアは飲んだ後から少しも動いていない。まるでそこだけ時間が止まったように…すると髪がぞわわと動き始めた。

「…あのーアリアさん？」

「あ、あー？ なんれすか？」

コップを机に叩きつけるようにおくとそこには酔ったアリアがいた。青い瞳がずんと座っている。

「とうかこの飲み物おいしいからおかわりー！」

「やっぱりか？ アリアはいくつ？」

「二百と十五歳なのらー！」

上機嫌なアリアは完全に酒に飲まれたらしい。二百と言うのは余分だ。おおよその子は十五歳のほかにない。ジグの手にしていたのはぶどう酒でかなり酒度は低いはずだった。しかしこんな軽く告いだだけのものに酔うとは…。

「それよりそれ頂戴！」

「……」

ガルルとうなり始める始末。本当に龍じゃないな…と思った。いところ捨て犬か、捨て猫のところだ。

ジグは彼女にあきれながらもう一度酒を飲ませたのだった。

ジグの朝は早い。彼は机に突っ伏した状態からゆっくりと起きる。背中を伸ばすと関節がなる。ベットは龍族のアリアが規則的な寝息で寝ていた。

「あのあとずっとアリアは飲んでいたのか…」

周りには吐瀉物とビンの山。この部屋が酒の匂いと、酔の匂いが充満している。

まずは扉を開けて換気することからはじめた。外はまだ太陽の光が出ていない。陣割と地平線の先が赤くなっているがまだ先のことだ。だが、十分明るい。

体が自然に背伸びをする。そして紙袋と箒で吐瀉物をどうにかすることを先決にした。

「おはよう」

「ん、あ……」

アリアがゆっくりと起きるとはたんと倒れる。ジグはやっぱりかと思った。

「頭が重くてかなわん…貴様何をした」

「君が酒をたくさん飲んだんだよ。それは二日酔いってやつだよ」

ジグは手に持っていた黄色い果実を渡す。

「これは？」

「檸檬つて胃つて酔い覚めにはいい果実だよ。どうかな？」

「ふむ…すぐに治るのか？」

個人によると言っておいた。アリアは果実をしげしげと見てくんくと匂いをかぐ。そして大きな口でがぶりとかじりついた。

その直後大きな声が響いたのは書くまでもない。

「んで、龍と人間が共存したとしても、大いなる敵に立ち向かうには何かいるんだらう？」

ジグの頬には殴られた跡があった。綺麗な拳の跡が残っている。

その殴られた部分をさすりながらジグは言った。

「あ、ああ」

突然アリアは尻すぼみする。ジグはそれに気づかないで話を続ける。

「んでそれはなに？ 契約とか？」

「契約？」

ああ、とジグは言った。

「水の聖みづのせいと契約をして汚水を清くしてくれたりとか、いい陶器ができるように鍛冶の聖と契約をしたりとかそういうのであろう？ 龍と契約するはいいのだが、何を代償にすればいいんだ？」

この国は契約を主に行っている。大地には大地の聖に豊作を願う。災害からも耐えられる野菜を作ってくれるように願ったりするのだ。

「そんなものはない」

きつぱりというからジグは顔を顰めた。アリアはコップに入っている冷たい飲み物を飲んだ。

「…は？」

「言ったであろう。我らは元は共存していたと、お互いが契約をして強くなるなんぞそれはただの繋がりでしかない。ゆえに契約には何も意味を持たんよ」

「なら俺らは何をもって大いなる敵と戦うんだ？」

その質問の答えはしばらくの沈黙を有した。アリアは顔を赤くし、芽を閉じる。

「絆だ。信頼し、恋をし、接吻をする。その行為を契約とするのだ」

「…要するに」

「そうだ。とアリアは言葉をふさぐ。

「結婚だ」

「…本当か？」

「ああ、我は、そのためにここに来たのだ。仕方なく適当に回っていたらちょうど祭りをやっていたから眺めていたら途中で終わってしまうものだから仕方ないと思いきこらへんで拾った丸太を運び、燃やしていたのだが、誰も来ないから一人で真似事をしていただけだ。べ、別に寂しかったとは思っておらんぞ！」

「あ、ああ」

「そこに貴様が現れた」

「なるほどね」

「だからびつくりして僕に攻撃しようとしたのか。」

「お、我はだから、その英雄おっこをだな。作らねばならんだ。そして貴様は我を解放し、食べ物くれた。感謝する」

「うん」

そこでとアリアは言葉をつなげる。真剣な瞳がジグを襲つ。今までのようなふざけているような瞳はどこかに行った。

「ジグ、貴様でもいいなら我の英雄とならぬか？」

英雄になり、大いなる敵を滅ぼし、英雄となる約束を得られる。

こんな歴史に自分を残せる機会はない。

「断る」

「なぜだ！」

身を乗り出してジグに迫る。

「オレは英雄になるためにアリアを拾ったんじゃない。綺麗だから拾ったんだ」

「それは、どういっ……」

瞬間遠いところで地面が爆ぜる音が響く。ジグは驚きその音がしたほうを見る。窓から見えるその光景は空に触れるまで広がった砂埃だ。

「大いなる敵が来たか……」

アリアは憎憎しげに吐き捨てる。

「アリア！」

ジグが叫んだときにはもうアリアは窓に足をかけて跳躍した。

龍鱗が足を覆い始める。二本だった足は一つになり、一つの尾になる。そして魚のようなひれが付いていた。腰には三対の小ぶりな翼が生えており風を掴み宙へ浮く。

「ジグ」

アリアはジグノ名を呼び、見た。

「短い間だったが、我を世話してくれて感謝する」

そしてアリアは風を手で押し大いなる敵の元へと向かった。

## 衝突

それは突然だった。

男が鍬を持ち畑の手入れをしているときだ。上から何かが降ってくる。白い結晶の塊だった。

寒い季節になると雨の代わりに雪が降る。男は上から降ってきたものを雪だと思い上を向いた。だがそれは見間違いだった。

タンポポのような綿毛の種がひらひらと降りてきていたのだ。

男はそれを掴もうと手にする。

すると種は突然のように成長をした。

種から生えた根は男の腕を貫き、根をはり、血液を吸い取る。反比例のようにだんだんと大きく形を形成する。

一匹の竜。

みしみしと幹が割れるとそれは口になり、大きな咆哮を生み出した。びりびりと石が震える。すると大地は隆起し、現れたのは巨大な根だった。

それは竜を中心にして円状に伸びる。

まさに化け物だった。

根は国の民を襲い始める。根はそれぞれ竜の頭を持ち人間を食い殺す。そのたびに竜の形をした木は大きく膨れ上がってゆく。

そのとき竜は炎に包まれる。

囲むように燃え上がる炎によって竜の頭を持つ根は焼き払われた。「貴様、これ以上の成長を許さん。今ここで燃え散れ」

竜は頭を上げるとそこにはアリアがいた。アリアは両手を前に構え、その両手の間には炎の塊がある。アリアはそれを竜に向けて投げた。すると炎は網のように広がり、そして竜を覆う。

炎に囲まれた竜は暴れる。じわじわと燃え上がる体を守ろうと炎の壁を切り裂いた。

すると瞬間的に空気が送り込まれる。その空気に反応した炎は爆

発的な燃焼を起こした。

その威力はすさまじく草木は一瞬にして灰になり、台地は焼き野原へと成り果てた。

「ふん。契約などなくても我一人で事足りるではないか」

そういつてアリアは自分を介抱してくれたジグを思い出す。

「あいつなんかいなくても我は……」

そのとき焼け野原から根がアリアを襲う。

アリアはそれに驚き、とっさに避けようとしたが一本に巻きつかれ、地面へと叩き落された。

「っ！」

地面にこりつけられるように引き摺られると今度は上に放り投げられる。逃げれると思ったが今度はうえから根が振り落とされる。

それにもちろん対応できないアリアは鞭で叩かれたかのように地面へともう一度叩き落された。

「……………」

アリアは龍としてのプライドを叩き潰されていた。自分がいかに無力なのか思い知られる。体を動かす気力もまったくなくなっていた。

ふと思い出す少年の姿。ぜんぜん体も未熟で普通の青年。

「ジグ……………」

体は根で拘束されて龍の目の前まで運ばれる。うつろな目でアリアは竜を見た。明らかにアリアを見下している目だった。

「ジグ……………」

あふれる涙。彼の名を呼ぶアリアは龍としてではなく、一人の少女として名を呼んだ。竜は口を開きアリアを食らおうとする。

「うおおおおおー！」

うなり声と同時にアリアを拘束していた根が切り落とされた。アリアの体はゆっくりと落ちる。

「アリアー！」

彼女の名を呼ぶ声はアリアは知っていた。アリアは首を回し彼を

見る。

手には安物の剣が握られている。服も防具も何も無い。

「馬鹿、死んじゃうよ」

「契約だ」

え、とアリアは言った。竜は根を動かし、ジグに襲い掛かる。ジグはそれを剣で切り落とす。だがほかの根は避けるしかできない。

「大いなる敵を滅するのを手伝う。その代わりアリアは俺の傍にいろ」

「…我は、龍だぞ」

「つつ！」

剣を奪われ、手ぶらになったジグを根は襲い掛かる。アリアはジグの手を掴むと空へと逃げた。

「それでも、俺はアリアに惚れた。俺はアリアが好きだ」

「後悔するな」

アリアは顔をジグへと近づける。ジグは改めてアリアの顔を見て綺麗だと思った。時間がゆっくりと流れ始める。アリアの口から漏れ出す力の光。

ジグはそれを受け入れるために自ら近づいた。

接吻。ジグの体にアリアの力が注ぎ込まれる。竜はそれを阻止しようとして攻撃を行う。

それは一瞬の出来事だった。

ジグとアリアの元へと走る根は一瞬にして切り刻まれる。

大地に降り立つジグ。左手にはアリアを抱きかかえるように支えている。その姿は以前と変わらないが、明らかに何かが変わった。

「コンウエル 眞理の鞘」

右手に現れたのは鞘だった。

竜は咆哮しこれまでの数のたくさんの根をジグへと向けた。

「ジグ！」

「大丈夫だ」

鞘に手をかけると大地から一本の剣が現れる。



それを手にするとまず先に来た根を切り落とす。そして次の根を切り落とすと次々と襲い掛かる。

すると今度は傍から剣が湧き出た。

ジグはそれを掴むと三本の根を右手の剣で切り払い、左手にあった剣を回転させながら投げる。その剣は勢いがとまらず奥に控える根を切った。左手から来る根を旋回し切ると今度は左手の近くに剣が湧き出てくる。

そのすべての行動は一つにつながっていた。

「真理の鞘：任意の場所から剣を作り出す鞘……」

アリアはジグの力を判断していた。

すべての剣は形が統一されていてそれらはすべて鞘に収まる形である。

「でもそれだけじゃ大いなる敵に近づくことができない……」

アリアは傷ついた体をふるいたたせ、飛んだ。

「ジグはあの巨大な体の急所を狙っているはず……」

竜の近くまで行き炎を当てる。

竜はそれに気づき、何本か根をアリアの方へと行かせる。アリアは旋回しながら根の攻撃を避け、炎で焼き払った。

ジグは根とまだ戦っていた。もう何本目の剣の精製だろうか。だがアリアの力をもらったジグの体は疲れを感じなかった。

「でもこれじゃきりがない……」

ジグは攻撃をやめて根が一斉に来るのを待った。そしてジグは剣を根の方へと投げる。

「レプリカント」

剣の軌道上に何本もの剣が現れる。ジグは近くで作り出した剣を構えた後、剣を殴りつける。

それらの剣はすべて根の方へと飛んで行き、すべてを切り落とすた。

道が開かれた。

ジグは剣を捨て、開かれた道を走り抜ける。まだ根は何本か生き残っていたが、この根の嵐をどうにかしなければ埒が明かないのだ。その根はまた近くで製造した剣で切り落とす。

黒い血で切れなくなつた剣を捨てる。

根の嵐を抜けると目の前には本体がいた。

「製造。ブレード」

すると鞘は巨大になる。身の丈以上になりその鞘はジグの何倍も  
の大きさになる。

「貫け」

竜のしたから鞘と同じ大きさの剣が現れた。

竜は咆哮をあげる。それは威嚇でもなく、苦痛だった。

「急所のような。その腹は」

ジグは右手を前へ突き出すと今度は何本もの剣が竜を貫いた。

「アリア！」

「燃え散れ！」

アリアは炎の塊を打つ。その炎は剣に熱を運びさせ、竜を内部から焼いた。

竜は断末魔の声を上げる。しばらくの間根は暴れていたが炎に包まれ灰になってゆく。

そして竜は息絶えた。

「アリア」

うえからアリアが降りてくる。アリアはすこし疲れている顔をしていた。

「大丈夫？」

「流石だな英雄」

「ジグでいいよ」

「ジグはもう言わない。我は、お前の女だ」

そういつてアリアはジグへと抱きついた。

## エピソード

半年が過ぎた。

目を覚ますといつものように控えめながらも柔らかい胸が目の前にある。

ジグの頭は齡二百と十五歳。二百は余分のアリアに抱かれていた。「……」

少女特有の甘いにおいをゆっくりと吸い、ふうと息を吐くとくすぐったそうにアリアは甘い声を上げた。

「アリアー？」

アリアは起きなかった。

ジグはため息を漏らした後、自力で抜け出した。自分の頭の変わりに枕を突っ込んでひとまず退散する。

あれ以来大いなる敵は現れていない。

だが、大いなる敵というには何体もいると考えていいと思っ

る。「……ジグ……ん……」

寝言でジグの名を呼んでいる。ジグはアリアを見ると枕をぎゅっと抱きしめていた。

その可愛い行動にジグはこれでも龍なんだと自分に言い聞かせた。

「おはよー……」

アリアが寝癖を作りながらジグに言う。ジグはアリアが起きるまでに朝ごはんを作っていた。

干し肉を戻して胡椒で味付けしたスープと厚めに切ったパン。そして隣の家からもらった焼いた卵だ。

「今日は豪華だな……なにかいい日でもあるのか？」

そういつてスープをすすらずと口にするアリア最近は温かい飲み物

が飲めるようになり暖かいものがこんなにおいしいのかという感動を覚えていた。

「さあ？ 何があるでしょう？」

「もったいぶらないで言え。我の英雄殿よ？」

ジグはそういわれるのが嫌いだ。

「まあ後で話す。このあとちょっと出かけよう」

「構わん」

そして先に食べ終わるのはアリアの方だった。

ジグとアリアはこの国では英雄扱いだ。国を守った栄誉として不自由な生活を送っていた。

「何をどこにいくんだ！」

「だから内緒だって」

ジグはアリアの手を握り、引っ張る。アリアは付いていくしかできなかつた。

「ここだ」

そういつて着いた場所はアリアと始めてあつた場所だ。

「覚えているか？ アリアが俺に言ったこと」

「龍との契約は結婚だってやつ？」

ああ、とジグは言う。

ジグは振り返るとポケットから小さい箱を取り出す。

「これは？」

「龍との結婚は接吻だが、今度は人間の結婚というのをしてもらう」

アリアは小さい箱を開けるとそこには銀色に光る指輪だった。

「アリアドラゴニクス、龍族の姫よ」

ジグはその指輪を取り、アリアの薬指に通す。アリアは涙を浮かべ、それを見届ける。

「俺と…結婚してくれないか？」

その返事はこの話を書く必要はないだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6436z/>

---

竜殺しの英雄の指輪

2011年12月22日23時50分発行